

ふたつの「収容所物語」

— シンシア・カドハタとヨシコ・ウチダの日系児童文学 —

末 木 淳 子

1. はじめに

近年、アメリカで出版される子どもやヤングアダルト対象の作品を読む時、そこに見られるエスニシティの多様性に気づく。半世紀前には「子どもの本は白人ばかり¹⁾」と嘆かれたアメリカ児童文学だが、今や登場人物のエスニシティは大きな広がりを見せるようになった。また作者も様々なバックグラウンドを有し、アジア系アメリカ人作家の活躍も顕著である。なかでも日系作家シンシア・カドハタ (Cynthia Kadohata, 1956~) は意欲的な作品を次々と送り出し、現代アメリカ児童文学の担い手の一人として注目されている。

日系3世として1956年にシアトルで生まれたカドハタは²⁾、『七つの月』(*The Floating World*, 1989) など大人に向けた作品で知られていたが、2004年に初の児童書『きらきら』(*Kira-Kira*, 2004) でニューベリー賞³⁾を受賞した。以来、カドハタは創作対象の中心を子どもやヤングアダルトにおいている。『七つの月』『きらきら』の両作品は、ともに日系アメリカ人が家族の絆のもとで困難を乗り越えアメリカ社会を生き抜く物語である。これらの作品にみられる強い家族志向は、日系文学全般にみられる際立つ特徴といえよう。家族志向と並んで従来の日系文学にみられるもう一つの特徴は、作品の多くが第二次世界大戦を直接、あるいは間接に描いていることである。しかしながら、『七つの月』にも『きらきら』にも戦争の影はみられない。カドハタは敢えて物語に戦争体験を反映させないことで、新しい日系アメリカ人文学を開拓してきたと言ってもよいであろう。

ところが、カドハタは2006年発表の『草花とよばれた少女』(*Weedflower*, 2006) で第二次世界大戦中の日系人の収容所体験を正面から描いてみせた。この作品は単なる戦争時の記録文学にはとどまらない児童文学として高い評価を受け、同年に日本語に翻訳されている。しかし、なぜ彼女はそれまで描かなかった「戦争」をこの時期に収容所体験として著したのであるだろうか。また、従来のいわゆる「収容所文学」との相違はどこにあるのだろうか。本稿はこれらの疑問に答えるべく考察するものである。

考察に当たって、収容所体験を描いた他の児童文学作品との比較を試みながら論を進めたい。比較の対象として、ヨシコ・ウチダ (Yoshiko Uchida, 1921-1992) によって1971年に著され、1973年に日本に紹介された『トパーズへの旅』(*Journey to Topaz*, 1971) を取り上げる。カドハ

タの『草花とよばれた少女』の主人公は太平洋戦争開戦当時12歳の少女であるが、ウチダの『トパーズへの旅』も11歳の少女を主人公としている。主人公の年齢が近いこと、また両者とも日米開戦時にカリフォルニアに住んでいたことなど共通する点が多く、比較の対象としてふさわしいものと思われる。

本題に入る前に、まずこれら作品の背景となった第二次世界大戦時のアメリカ在住日系人強制収容と戦後の補償問題について概観したい。その後ウチダ作『トパーズへの旅』、カドハタ作『草花とよばれた少女』の順で考察を進める。その過程で、カドハタが戦後60年を経て『草花とよばれた少女』を著した意義を明らかにしていきたいと思う。

2. 第二次世界大戦下の日系人強制収容所と戦後補償

第二次世界大戦下での日系人強制収容並びにその戦後補償については多くの詳細な研究がなされているが、ここでは、上に述べた2作品を読み解くに当たり重要な関連があると思われる事項について概略を記すにとどめたい。

2.1 日系人強制収容所

1941年12月7日⁴⁾、日本の航空部隊がハワイ真珠湾を奇襲攻撃すると、ルーズベルト大統領は翌8日に議会の承認を得てただちに対日宣戦布告をした。この日を境にアメリカ在住日系人の運命は大きく転換することとなる。まず真珠湾攻撃直後の数日間に司法当局は、仏教や神道の宗教関係者、日系コミュニティの指導者、日本語学校教師など、1,000人以上の日本国籍を有する日系人を逮捕した。引き続き逮捕者の数は増え、翌年2月半ばには2,000人余となっていた。この間にアメリカ西海岸における反日世論は高まり、大統領行政命令に基づいて権限を委譲された陸軍省は1942年3月2日に全ての日系人約12万人の西海岸地域⁵⁾からの立ち退きを命じた⁶⁾。立ち退きは即ち政府管理下の施設への強制収容を意味するものであった。西海岸の日系人は3月末から順次西海岸内の仮収容所⁷⁾に拘禁され、数か月を経て内陸部の急ごしらえの10か所の収容所に分散して拘禁されていった。この強制収容政策が公式に終結するのは1944年12月17日である。最長では約3年間に及ぶ収容所生活を強いられたことになるが、全ての日系人が全期間にわたり拘禁されたわけではない。煩雑な申請書類を作成の上で合衆国への忠誠心が認められると、収容所を出て就学や就職のために再定住先に赴くことが可能であった。多くの2世はこの制度を利用して、収容政策の公式終了以前に収容所を出て東部や南西部に移住した。また、1943年1月には日系アメリカ人戦闘部隊の結成が決定され、数千人が収容所から軍隊に入隊している。

この収容政策の問題点は多々あるが、まず挙げられるのは、等しく対戦国でありながらドイツ系、イタリア系住民には強制収容の政策がとられなかったことである。彼らに対しては1世の夜間外出が制限されたにとどまり、日本にルーツを持つ全ての者が強制収容された日系人とは扱いが異なった。ここには、強制収容政策の人種主義的側面をみることができるであろう⁸⁾。このよ

うなアジア系に対する人種差別意識と日系人を経済的脅威とみなす排日感情が、西海岸で日系人強制収容政策がとられたと主な要因と考えられている。さらに問題となるのは1世と2世・3世が区別なく強制収容されたことである。日本からの移民は帰化の権利を与えられていなかったため日系1世は当時全て日本国籍であった。しかしアメリカで生まれた2世以降の世代はアメリカの市民権を有していた。敵性外国人の隔離という意味での収容であったならば、アメリカ市民である2世・3世を外国人として収容することは納得されない。これらの事実は、ウチダ、カドハタの作品を読み解く上でも留意を要する。

収容所での日々の生活については多くの記録が残されているが、ここでは本論と関わる子どもの暮らしについてみてみたい。突然の立ち退き命令で学校から切り離された子どもたちは、住み慣れた土地を家族とともに追われ、仮収容所から荒野の収容所へと移動を強いられる。日系人の親たちにとって子どもの教育は大きな関心事であった。仮収容所においてもすでに自主的な学校が開かれていたが、内陸の収容所に移るころには資格のある2世を中心に自発的な学校が運営されていた。しかし、このような日系人の手による教育はアメリカ政府には受け入れられず、1942年末には各収容所に戦時転住局による正規の学校（小学校とハイスクール）が開校されることとなった。とはいえ、それは鉄条網で囲まれた収容所の中で理想的な民主主義教育を行おうとするもので、大いに矛盾に満ちたものであったといえる。学習意欲を失い、無気力や非行に陥る子どももみられたが、中には優秀な成績をあげて外部の大学に進学するものもいた。強制収容所という隔離され管理された閉塞的な環境にあっても、遅しく勤勉に生きのびた日系人の様子をさまざまな記録は伝えている。子どもたちもまた、大人にならって過酷な状況を生きのび成長していった。ウチダ、カドハタの作品の中にそのような彼らの姿をみることができるであろう。

2.2 戦後補償問題

日系人強制収容に対するアメリカ政府による戦後補償は、1948年7月にトルーマンによって署名された日系人立ち退き補償請求法に始まる。同法は日系人が強制収容による損害・損失の補償請求をできることを定め、1950年1月の締切までに約2万件を超える請求がなされた。政府が支払った補償金はとうてい十分なものとは言えなかったが、この補償によって、強制収容が日系人の財産権を侵害したことだけでも公に認められたことは成果であった。

1960年代に入るとアメリカは政治社会的に大きな変動の時代を迎える。高まる公民権運動やベトナム反戦運動の経験を経て、60年代は人々の中にマイノリティの権利に対する意識が目覚めた時期といえる。アフリカンアメリカン、ネイティブアメリカンの権利回復を求めるブラックパワー、レッドパワーの台頭に次いで、70年代に入ると、日系アメリカ人の中にもイエローパワーともいえる動きがみられるようになった。2世以降の世代を中心としたこの動きは、強制収容政策に対する名誉回復を主眼とする第二次補償請求運動へと発展し、1980年にはカーター大統領のもとで「戦後民間人転住抑留調査委員会」が立ち上げられ、1983年に最終報告が出されるにいたる。そして、ついに1988年にはレーガン大統領によって「1988年市民の自由法」（通

称「日系アメリカ人補償法」)が署名され、公式の謝罪と1人当たり2万ドルの補償金が約束された。ここにあって、強制収容によって損なわれた日系アメリカ人の名誉回復がようやく実現したといえよう。

後に詳しくみるが、ウチダとカドハタの作品は、第二次補償請求運動をはさんで、その前後に出版されている。戦後補償への見直しが始まったばかりの70年代初めに書かれたウチダ作『トパーズへの旅』と、日系人収容の過ちを政府が公式に認めた後に書かれたカドハタ作『草花とよばれた少女』とを比較する時、収容所やそこでの生活の描かれ方が異なるのは当然であるといえよう。戦後補償の問題は、2つの収容所物語を読み比べるに当たって重要な要素であると思われる。

3. ふたつの収容所物語

ここでは、まず『トパーズへの旅』についてその粗筋を紹介した後で作品について考察する。次に『トパーズへの旅』と対比しながら、『草花とよばれた少女』について論じたい。

3.1 『トパーズへの旅』(ヨシコ・ウチダ)

この11歳の日系少女ユキの物語は、1941年12月7日(日曜日)の家族団欒の様子から始まる。日本企業に勤める父、しっかり者の母、大学生の兄、そしてユキの4人の家族はその日までサンフランシスコ郊外で穏やかな暮らしを送っていた。若い時にアメリカに渡ってきた父は、今では日系コミュニティのまとめ役として地域の人々に頼られる存在となっている。父の後を追うようにアメリカにやってきた母も、持ち前の親切さで人種を問わず多くの友人に囲まれていた。そんな家族の休日を真珠湾攻撃のニュースが一変させる。ラジオからニュースが流れるや心の準備をする間もなく、突然FBIと警察がやってきて父を連行してしまったのだ。1週間してやっと父の消息が分かり短い面会がかなったが、その直後に父はモンタナの捕虜収容所に送られる。父の身を案じながら年を越した一家にやがて強制収容の話が聞こえてくる。心配するユキに、「アメリカで生まれたれっきとしたアメリカ市民の子どもたちが強制収容されるわけではない」と母は強く否定した。しかしその日はやってきた。日系人は全て5月1日までにタンフォランの仮収容所⁹⁾に集まるようにとの命令が出されたのだ。持参できる物は各自が運べるものに限られ、猶予は10日しかない。混乱のうちに家財を処分し、ペットの引き取り手をさがし、親しい近隣の人々に見送られながら一家は仮収容所へと向かった。

タンフォランでユキたちが割り当てられた区画は競馬場の馬小屋として使われていた区画で、簡易ベッドが置かれただけの粗末なものであった。食堂も洗面所も共同、トイレにはドアもないありさまだったが、一家は少ない食料を分け合い、廃材で家具を作りながら日々を送っていた。そんな中でも、隣に住む少女エミと友人になったり、もとの住居の隣人たちの慰問を受けたり、ユキには嬉しいできごともあった。一方、父のかわりに家族を支えていた兄は、収容所を出て東

部の大学に行く機会を与えられるという話を知って逡巡していた。仮収容所の暮らしも数か月になり、自主的な自治組織ができ収容所内の学校も始まったころ、収容者全員が内陸部ユタ州トパーズの収容所に送られることになった。兄の進学の話も立ち消えとなる。

トパーズへの2日2晩の旅は過酷なものであったが、到着した土地はあっという間に厳しい所だった。砂漠の中の収容所はたびたび砂嵐に襲われた。病気に倒れる者も出て、友人のエミも結核にかかり病院に隔離されることとなった。さらに悪いことには、エミの祖父が鉄条網からの脱出を企てたと誤解され米兵に撃たれて亡くなってしまった。唯一の明るい話題は父が釈放されて1942年のクリスマスにトパーズの家族のもとに戻ってきたことであった。そして年が明けると、陸軍の徴兵官がトパーズにやってきた。日系2世にも入隊が許されるようになったのだが、2世の入隊をめぐる収容所内の意見は分かれた。若者を有刺鉄線の中に閉じ込めておきながら国のために戦えというアメリカ政府の矛盾に反発する者、アメリカに対する忠誠心を示す絶好の機会だと言う者、様々に議論される中で、兄は軍隊に志願することを決める。父も兄の決意を支持したが、ユキにとっては兄との別れは悲しいことであった。

軍隊に入る者、東部の大学に進学する者、外に仕事を見つけて許可を得て出ていく者など、1943年になると収容所を離れる人数も増えてきたが、ユキの父は捕虜収容所から仮釈放の身分なので簡単に外に出るわけにはいかない。しかし、収容期間も長引くにつれ、管理事務所で白人と仕事をしている父を敵対視する日系人も出てきた。父の身に危険が及んだ事件をきっかけに、ユキの一家はとうとう許可を得て収容所を出られることになった。エミとの別れは淋しかったが、新しい世界であるソルトレイクシティに向けて、ユキは希望に胸ふくらませてトパーズを後にしたのだった。

以上、『トパーズへの旅』のストーリーを追ってみた。この作品は作者ヨシコ・ウチダの実体験をもとに著されたフィクションであるが、史実を忠実に踏まえて書かれたものである。ウチダの戦時下の体験は自伝的ノンフィクション『荒野に追われた人々』に詳しい。ウチダの父は同志社を卒業し、1906年に22歳でカリフォルニアにやってきた日系1世であった。ポートランドで日系商店の経営に携わった後サンフランシスコに移り、日米開戦当時は三井物産サンフランシスコ支店の副支店長を務めていた。母も同志社で学んでいた縁で父を紹介され、父と結婚するため1916年に渡米している。高い教育を受け、恵まれた職業に就いていたウチダ一家は、西海岸の日系人の中でも特別な階層に属していたといえよう。そのことは『トパーズへの旅』の作中で、主人公ユキの一家によく反映されている。一家は「白人」の多く住む地域に暮らし、彼らと親密な近所付き合いをしている。ユキたちが収容所に送られた後も、近隣の友人たちからの援助の品は絶えない。また一家が収容所を出るに当たっては収容所の外の多くの友人の手助けがあった。困難な環境にありながらも、ユキの一家はまだ恵まれていたといえるだろう。ウチダ自身は開戦当時カリフォルニア大学に在籍していたのだが、トパーズへの強制収容で勉学を中断を余儀なくされてしまった。しかし、1943年夏にはスミスカレッジに入学を許可され収容所を出ることができた。1年余の収容生活で大学に復帰できたことも当時の日系人の中では幸運であったといえ

る。

さて、『トパーズへの旅』に話を戻すと、その作中には収容政策への批判はみられるものの、「白人」やアメリカ社会への嫌悪はみられない。強制収容という理不尽な立場にありながら、それでもなおアメリカという国家へのゆるぎない信頼や忠誠心が読み取れる。それは、兄の入隊志願で紛糾する場面での、ユキの父の次のような発言に見ることができる。

“It is true this country has made a terrible mistake, interning its citizens without even a fair trial. But now it is asking for help and there isn't time to waste. Yes, I think if I had to choose, I would go, in spite of everything. I would have to make decision.¹⁰⁾”

「確かに、ちゃんとした裁判もせずに市民権を持った者までも収容所にほうりこんだのは、大きな誤りですよ。しかし現在この国はわれわれの協力を求めているのです。時間的余裕もないんです。そうです、もし私がどちらかを選ばないといけないとしたら、私はどんなことがあっても志願しますね。そうする義務があると思うのです¹¹⁾」

また、友人エミの祖父が誤ってアメリカ兵に殺される場面も至極あっさりと描かれ、残された家族の悲しみにも深く言及されていない。さらに、作品の最後は、ユキの一家が収容所の外に出ることができた時の次のような場面で結ばれる。

It was as though she was seeing the whole world with new eyes. The colors seemed brighter, the air seemed fresher, the sounds sharper. It was as though she had climbed out of a cocoon and suddenly discovered the sun. “Hello, world.” Yuki said brightly. It was good to be back¹²⁾.

収容所にいたときに比べ、目にはいるものすべてが新鮮だった。色という色が明るく輝き、空気はさわやかで、音さえも生き生きと聞こえた。それは、まゆからはい出したかいこが、突然太陽の光にあたったような感動だった。帰って来て、本当によかった。「新しい世界よ、こんにちは！」ユキは明るい声で叫んだ¹³⁾。

この場面を読むと、収容所の外の生活に期待に胸ふくらませるユキの様子が目に浮かぶ。鉄条網に囲まれた生活を強いられたにもかかわらず、アメリカ社会への強い肯定感を持ち続けるユキの心情が読み取れる。アメリカ社会や国家を受け入れ信頼することを、ウチダは読者の子どもたちに伝えようとしているように思われる。『トパーズへの旅』を読み終えた時、もっとも強く印象に残るのは、強制収容という過酷な状況に置かれてもなお礼節をもって忍耐強く明るく生き抜く日系人の姿である。収容政策そのものに対する批判はその背後に隠れて印象が薄められてしまっている。

はたしてこれはウチダの真意であったのであろうか。このことを考えるに当たっては、作品が成立した時代背景を考慮しなければならないだろう。『トパーズへの旅』が発表されたのは1971

年であった。1970代初頭は60年代の黒人公民権運動のうねりが他のマイノリティにも広がりを見せ始めた時期であり¹⁴⁾、日系人2世にもその波動は感じられていたことと思われる。戦後まもなくの第1次補償によって、財産権については回復された日系人であったが、傷つけられた誇りの回復はまだなされていなかった。補償問題への見直しが始まったばかりのたいへん微妙な時期に、『トパーズへの旅』は発表されたのであった。まだ排日感情も残っているこの時期に、強制収容政策の負の面を強調することにより「白人」を刺激することは憚られたのかもしれない。声高に権利の回復を唱えるには時期が早すぎたともいえるであろう。

『トパーズへの旅』からおおよそ10年後、1982年に発表された自伝的ノンフィクション『荒野に追われた人々』のエピローグでは、ウチダは次のように述べている。

Today I would not allow my civil right to be denied without strong protest, and I believe there would be many other Americans willing to stand beside me in protest¹⁵⁾.

現在、私は、自分の公民権が否認されるのを、激しい抗議もせずに、そのままにさせておくつもりは決してないし、他のアメリカ人が、自ら進んでともに抗議してくれるものと信じている¹⁶⁾。

ここでは、ウチダは明確に日系人の権利の回復を求めている。カーター大統領のもとで「戦後民間人転住抑留調査委員会」が立ち上げられたのが1980年であった。『荒野に追われた人々』が出版された82年には、もはや反日感情に配慮する必要はなかったものと思われる。出版の翌年83年には、委員会の最終報告「侵害された個人の正義」が出される。ここに至って、ようやく日系人の名誉回復がなされたといえるのだが、ウチダの著作『荒野に追われた人々』も補償問題の解決に一役買ったことは想像に難くない。

『トパーズへの旅』を読むとき、日系人強制収容政策に対する批判や告発の弱さが目につくのは、作者が日系人の中では恵まれた環境におかれていたこと、作品が第2次補償交渉の始まろうとする時期に発表されたため反日感情への配慮が必要であったこと、この2つ理由によるものと思われる。しかしながら、このような弱点を有するものの、ユキの物語は、子どもたちに強制収容政策の実態を知らしめた点で、十分評価に値する作品といえるであろう。

3.2 『草花とよばれた少女』（シンシア・カドハタ）

次に、2006年に発表されたカドハタの作品『草花とよばれた少女』についてみてみたい。12歳の少女スミコの物語は、1941年12月の真珠湾攻撃前日から始まる。その日スミコは級友の誕生日会に招待されていた。招待された子どもたちの中で日系人はスミコ1人だった。胸躍らせて友人の家に着いたスミコだが、玄関で友人の母親に追い返されてしまう。彼女は娘が日系人を招いていたことを知らなかった。友人の父親は市議員の職にあり、反日感情の高まるカリフォルニアで、日系人の子どもを家に入れるわけにはいかなかったのだ。

ここに見られるように、カドハタの物語の主人公は、ウチダの物語の主人公ユキとは正反対の環境におかれている。反日感情の激しい開戦前後のカリフォルニアの地で、ユキは親切で理解ある「白人」に囲まれて暮らしていたが、一方のスミコは日系人コミュニティの中で生活していたのだ。スミコの家族は、祖父、叔父、叔母、2人の年上の従兄弟と弟の7人。交通事故で両親を亡くしたスミコは、弟とともに叔父の一家に引き取られたのだった。家族の仕事は花農家で、家族総出の作業をスミコも手伝う毎日だった。花の好きな彼女はいつか花屋を経営したいと密かに願い、「クサバナ」というあだ名も気にならなかった。スミコの家族は、ユキの場合とは違って、けっして経済的に豊かではない。しかし、家族の絆の強さは同様で、スミコも暖かい家族のもとで幸せな日常を送っていた。作者カドハタの父は、ニュージャージー州でヒヨコの雌雄鑑別士を職業としていた。9歳で父と母が離婚して彼女は母や兄弟、姉妹とともにシカゴに移るのだが、スミコの体験は幼い頃のカドハタの経験を映しているのかもしれない。

さて、真珠湾攻撃のニュースが流れた翌日、スミコの家にもFBIはやってきた。アメリカ国籍を持たない祖父と叔父は連行されてしまう。祖父は以前に日本人学校の校長をしていたことがあったのだ。日米開戦の日から翌42年5月にタンフォラン仮収容所に入るまでのスミコの家族の混乱ぶりはユキの家族と同様であるが、カドハタはウチダ作品に見られなかった情景も描き出している。ユキの場合は近隣の同情と協力の中で収容所へ入る準備が進められていた。そこには「白人」への感謝と親愛の情が描かれ、政府の政策に対しては批判的な言葉も見受けられるものの、「白人」を非難する描写はみられない。一方、スミコの物語には、「白人」に対する親近感はまったく感じられない。『草花とよばれた少女』に描かれる「白人」たちは、スミコの一家が処分しなくてはならない家財を買いあさる。ここでは年長の従兄弟イチローが「白人」に対する家族の反感を代弁している。「白人」が安く買ったたいたトラクターの代金を、イチローが道路に投げ捨てる場面は象徴的である。

「白人」たちに追い立てられるようにして、スミコの家族も、まず競馬場跡地に作られたタンフォラン仮収容所に落ち着いた。この仮収容所での数か月の不自由な生活はウチダの作品でも丁寧に描写されていたが、カドハタの筆致はよりリアルで辛辣である。人々が粗末な食事で下痢に苦しみ、銃を持ったアメリカ兵による住居の搜索におびえて暮らす様子が描かれている。スミコの一家がアリゾナ州ポストンの収容所に送られることが決まった時、スミコはイチローに尋ねる。「ここを出ると残るとでは、どっちがいいの？」イチローは「わからない」とうんざりしたように答えただけであった。これは、ユキがトパーズへ向けて仮収容所を出るとき、短い仮収容所の生活に名残りを惜しんだ場面とは対照的である。

スミコ一家の送られたポストン収容所は、アメリカ全土に10か所設けられた日系収容所の中でも特別な存在だった。アリゾナの砂漠の中に作られたポストン収容所は、転住センターによって管理されている他の9つの収容所とは違って、インディアン事務局によって運営されていた。インディアン事務局は規制が緩かったのか、あるいはアリゾナの砂漠の中では逃亡する者もいないと考えられたのか、ここには鉄条網の囲いはなかった。しかし、そこはサソリやガラガラヘビ

に脅える劣悪な自然環境であった。日中の暑さは厳しく砂嵐にも悩まされる日々ではあったが、カドハタはここでの収容生活を豊かに描き出す。勤勉な日系人は、砂漠の中にも灌漑施設をつくり農作業を始め、緑の畑をひろげてゆく。スミコも小屋の前の小さな庭で花を育てるのが楽しみだった。

何よりスミコの生活を彩ったのは、ネイティブアメリカンの少年フランクとの出会いである。『草花とよばれた少女』の後半では、スミコとフランクの淡い初恋がみずみずしく描き出されてゆく。日系収容所の建設によって自分たちに与えられた土地を奪われたと感じ、日系人に反感を持っていたネイティブアメリカンだが、日系人が農業を始めるのをみて、その農業技術を学びたいと思う者も現れる。土地を追われた者どうしの連帯感もめばえ始めていた。次の場面にはスミコとフランクが共感をいだきあう様子が、よく表れている。

“In fact, they’re going to take over your barracks when the war ends.”

“Why would they want to do that?”

“It’s better condition than some of them have now,” he explained. “So what happen to your farm?”

“It’s gone.”

“Gone where?”

“I mean gone for us. A lot of people lost everything they had during the evacuation.”

She hugged her knees to her chest.

He shrugged. “You’re not the first people to lose things.¹⁷⁾”

「戦争がおわったら、おまえたちの小屋を使うことになるだろうね」

「なんでそんなことするの？」

「部族によっちゃあ、いまよりましな環境で生活できるようになる。で、おまえのうちの農園はどうなったの？」

「なくなっちゃった」

「なくなったって、どこへ？」

「わたしたちのものじゃなくなった、ってこと。立ちのきのときに、たくさんの人が全財産を失ったの」スミコはひざをかかえた。

フランクは肩をすくめた。「財産を失うのは、おまえたちが最初じゃない¹⁸⁾」

日系人もネイティブアメリカンも、ともにアメリカ政府によって自分たちの土地を剥奪された者たちであった。収容所の物語を、日系収容所の中だけにとどめず、同じ土地とともに生きるネイティブアメリカンとの交流の中に描いたことが、ウチダ作品に比して、カドハタ作品の何よりの特徴であり、最も評価されるべき点であると思われる。

先にみたように、1970年代から80年代にかけての時期は、レッドパワー、イエローパワーの

波に乗って、それぞれのマイノリティグループが自分たちのエスニシティへの自信と自尊心を取り戻し、権利意識に目覚めていった時期であった。この時期、日系人も戦後補償問題の解決を通じて日系人としての誇りを取り戻していった。日系収容所を題材とするウチダの2作品『トパーズへの旅』と『荒野に追われた人々』はこの時代を代表する日系文学であった。続く80年代から90年代にかけては、多文化主義の議論が盛り上がった時期である。マイノリティグループが、それぞれのエスニシティに重きをおきながらも、互いに連帯しひとつの大きな共同体を形成することが提唱された。2006年に発表されたカドハタ作品『草花とよばれた少女』を読むとき、そこには多文化主義の影響を感じとることができるであろう。

多文化主義的視点から描かれていること以外に、カドハタの物語にはウチダの物語との大きな相違点がある。それは、スミコが収容所からの解放を自らは望まなかったことである。スミコの収容所にとどまりたいという強い意思は、出所を願い続けたユキからは想像もできない。そこには、スミコのフランクと離れたい思いもあったであろう。しかし、それ以上に彼女に出所を躊躇させた理由は、収容所の外にいる、日系人を嫌う多くの「白人」の存在であった。クラスメートの誕生会での屈辱をスミコは忘れていなかった。彼女は収容所の外に出ることを恐れ、「外で暮らすよりこの収容所にいた方が自由なの」とさえ言う。ここでカドハタは、収容所の中に「自由」を見出すスミコを描くことにより、長引く収容所生活が人間性を奪い、真の自由とは何かということさえ忘れさせてしまう恐ろしさを示している。そのようなスミコを正しい判断に導いたのはフランクであった。フランクにとってもスミコと会えなくなるのは辛い。また、農地を整備してくれる日系人はネイティブアメリカンにとって都合のいい存在でもあった。しかし、彼はスミコに次のように諭す。

Then he said, "I'm sorry."

"For what?"

"For saying it was better for the Indians if more Japanese stayed. I was wrong."

"But you'll get more land cultivated."

"It doesn't matter. The more people who are free in the world, the better it is for Indians. It's better for everyone. You should leave. You shouldn't live here."

"*You* live here."

"My future is here," he said impatiently. "Yours is somewhere else."

Tears still fell slowly down his temple and into his hair¹⁹).

フランクは言った。「ごめん」

「なにが？」

「日本人がたくさんいてくれたほうがインディアンにとって都合がいいなんていって。おれがまちがってた」

「でも、そのほうがたくさん土地をたがやしてもらえるよ」

「関係ないよ。世界に自由な人が増えたほうが、インディアンにとっていい。みんなにとっていい。おまえ、ここを出ていくべきだ。ここで暮らしてちゃいけない」

「フランクはここで暮らしてるじゃない」

「おれの未来はここにある」フランクはじれったそうにいった。「おまえの未来は、べつの場所にあるんだ」

フランクの涙がまたゆっくりとこめかみに落ちて、髪の毛のなかに消える²⁰⁾。

フランクの愛情あふれる説得によって、スミコは収容所を出る決心をする。この物語を読む子どもたちは、この場面で、何ものにもかえがたい真の自由の重さについて考えさせられることであろう。この物語の真骨頂がここにあるといえよう。

祖父も叔父も捕えられたまま戻らず、2人の従兄弟も志願して軍隊に入ってしまった。いま収容所にいる家族は、スミコと弟そして叔母の3人だけである。1943年春、叔母が仕事を見つけたシカゴに向けて、3人はボストン収容所を後にする。物語はそこで終わるのだが、解放の嬉しさより、前途への不安や別れの切なさが印象に残るエンディングである。解放の喜びに満ちた場面で終わる『トパーズへの旅』とは、大いに読後感が異なる。ウチダの作品もカドハタの作品も、ともに収容所から旅立つ場面で締めくくられるのだが、収容所の外に広がるアメリカ社会の捉え方の違いがはっきり示された終わり方である。

以上、カドハタの作品『草花とよばれた少女』をウチダの『トパーズへの旅』と読み比べながら検証した。カドハタはこの作品で、マイノリティグループが狭いエスニシティに閉じこもらず広く連帯することの重要性を、そして真の自由とは何かを、読者に示してみせた。『草花とよばれた少女』は、戦後補償問題を経て名誉の回復を果たした日系人が、その後さらに進む方向性を示したものと言ってもよいであろう。

4. おわりに

さて、本稿を閉じるにあたって初めの設問に戻りたいと思う。カドハタはなぜ戦後60年余を経た2006年になって初めて、日系人の戦争体験を描いた作品を発表したのであろうか。その疑問の答えを求めて、カドハタの言葉に耳を傾けたいと思う。2004年に Hsiu-chuan Lee²¹⁾ によってカリフォルニアでなされたインタビューで、「日本人の血を受け継いでいることは、あなたの日々の生活に何らかの影響を与えていますか」という質問に、カドハタは次のように答えている。

Well, maybe in little ways. Sometimes when I tried to interview somebody for my writing project, I would be afraid that people might not be willing to talk to me because of my Japanese ancestry. This never happened in my real life, but the feeling was like a ghost in my head. Another thing is that the internment happened once, and I somehow believe that it could

happen again. That thought would put a different awareness in my mind about my Japanese heritage. In a sense, I don't feel a hundred percent secure²²⁾.

そうですね、たぶんほとんどないと思います。時々、私は自分の創作のために誰かにインタビューをする時など、相手の人が私が日系人であるせいで、私と話すのを嫌がるんじゃないかと心配になることがありました。そんなことは実際には決してなかったのですが、その感覚はまるで想像上のお化けのようなものですね。もうひとつは、かつて行われた強制収容の事です。私はなぜかそれがまた起こり得ると信じているんです。そんな考えは私の心に自分が日本人の血を引いていることをあらためて自覚させます。ある意味で、私は100パーセントの安心感を持ってないのです。

ここでカドハタは「強制収容はまた起こる可能性がある」と述べている。「いつまた強制収容が起こるかもしれない」という不安感に駆られたカドハタはこの物語を著さずにはいられなかった、と考えてもあながち間違いではあるまい。強制収容のような政策がふたたび行われてはならない、そのためには子どもたちに事実を伝えていかななくてはならない、そういう強い思いが、『草花とよばれた少女』の根底には流れているように思われる。

ここにひとつの新聞のコラムがある。日本の戦争責任について日系アメリカ人のジョージ・ワシントン大学教授、マイク・モチヅキ²³⁾が『『忘れない』と言いつけよう』というタイトルで寄せた文章である。その中でモチヅキは日系人強制収容について次のように言及している。

収容所は今、国立公園局下で修復されている。わたしも家族と収容所の跡地に見学に行き、改めて過去を学んだ。売店には強制収容の歴史を記した書籍などが並んでいた。記憶を風化させず、米国が二度と同じ過ちを繰り返さないための取り組みがここにある。(中略)「私たちは忘れない。過ちを繰り返さない」と言い続けるべきだ²⁴⁾。

モチヅキもカドハタと同様、日系3世である。彼の祖父、父もやはり第2次世界大戦中に強制収容されたという。1世、2世から強制収容の話聞かされて育った世代が、続く世代に事実を伝えていこうとする意欲がこの文章からは伺える。

100パーセントの安心感を次の世代に残すために、カドハタも同じ意欲をもって『草花とよばれた少女』を書いたのではないだろうか。砂嵐吹く砂漠での収容生活を、ネイティブアメリカンの少年と手を携えて生き抜いたスミコ、彼女の物語は現代の子どもたちの心にも静かな感動を残し、大きな教訓を伝えてゆくに違いない。

註

- 1) Nancy Larrick, "The All-White World of Children's Book," in *Saturday Review* 48, (Sep. 1965), 63-65. ラリックはこの記事で、当時出版されていた児童書のうちアフリカ系アメリカ人が登場する児童書は全体の数%に過ぎないことを指摘した。
- 2) 父方からすれば3世だが、母方をたどれば4世となる。
- 3) ジョン・ニューベリー賞 (The John Newbery Medal) は1922年に創設された世界で最も歴史のある児童文学賞。アメリカ児童図書館協会によって運営される。毎年1月に前年に発表されたアメリカ児童文学作品の中から大賞1作と入賞数作が選ばれる。
- 4) 日本時間では1941年12月8日にあたる。
- 5) ワシントン、オレゴン、カリフォルニアの西海岸3州の西半分とアリゾナ州南半分を指す。
- 6) 例外規定はあり、約1か月の猶予期間の間に自主的に内陸部に転居したものは収容を免除された。自主的内陸転居者は1万人以下とみられている。
- 7) 都市近郊の競馬場などの施設が仮収容所として一時的に利用された。
- 8) 和泉真澄 2009: 72.
- 9) サンフランシスコ市南西部にある競馬場を改造した施設。1942年4月28日から同年10月13日まで開所され、約7,800人を収容した。
- 10) Uchida 1971: 133.
- 11) ウチダ 1985: 190.
- 12) Uchida 1971: 149.
- 13) ウチダ 1985: 213-214.
- 14) ネイティブアメリカンの運動の例では、1968年に結成されたAIM (アメリカン・インディアン・ムーブメント) が翌69年にはアルカトラス島を占拠、73年には急進派がウーンデッドニーを占拠するなど、レッドパワーの動きが顕著に見られたのもこの頃であった。
- 15) Uchida 1982: 148.
- 16) ウチダ 1985: 274.
- 17) Kadohata 2006: 160.
- 18) カドハタ 2006: 145.
- 19) Kadohata 2006: 246.
- 20) カドハタ 2006: 225.
- 21) インタビュー当時、National Taiwan Normal University に所属。
- 22) "Interview with Cynthia Kadohata," in *Melus*, vol. 32 (2007 Spring) 165-186.
- 23) 米ジョージ・ワシントン大教授 (国際政治学)、1950年生まれ。知日派として知られている。
- 24) 朝日新聞、2014年8月6日、朝刊。

参考文献

- 《日本語文献》
- 明石紀雄・飯野正子『エスニック・アメリカ——多文化社会における共生の模索 第3版』有斐閣、2011。
- 和泉真澄『日系アメリカ人強制収容と緊急拘禁法——人種・治安・自由をめぐる記憶と葛藤——』明石書店、2009。
- ウチダ、ヨシコ『荒野を追われた人々』波多野和夫訳、岩波書店、1985。

- 『トパーズへの旅』 柴田寛二訳, 評論社, 1983.
- 岡部一明 『日系アメリカ人：強制収容から戦後補償へ』 岩波書店, 1991.
- カドハタ, シンシア 『七つの月』 荒このみ訳, 講談社, 1991.
- 『きらきら』 代田亜香子訳, 白水社, 2004.
- 『草花とよばれた少女』 代田亜香子訳, 白水社, 2006.
- 小林富久子 「多文化主義的家族像：日系アメリカ作家たち」 木下卓・外岡尚美・笹田直人編著 『多文化主義で読む英米文学 — 新しいイズムによる文学の理解』 ミネルヴァ書房, 1999, 173-191.
- 島田法子 『日系アメリカ人の太平洋戦争』 リーベル出版, 1995.
- 竹沢泰子 『日系アメリカ人のエスニシティ』 東京大学出版会, 1994.

《英語文献》

- Kadohata, Cynthia *The Floating World*, New York: Ballantine Books, 1989.
- *Kira-Kira*, New York: Atheneum Books, 2004.
- *Weedflower*, New York: Atheneum Books, 2006.
- Mickenberg, Julia L. *Learning from the Left: Children's Literature, the Cold War, and Radical Politics in the United States*, New York: Oxford University Press, 2006.
- Naidoo, Jamie Campbell, and Dahlen, Sarah Park, eds. *Diversity in Youth Literature: Opening Doors through Reading*, Chicago: American Library Association, 2013.
- Russell, Jesse, and Cohn, Ronald *Yoshiko Uchida*, Bookvika publishing, 2012.
- Smolen, Lynn Atkinson, and Oswald, Ruth A. eds. *Multicultural Literature and Response: Affirming Diverse Voices*, Santa Barbara: Libraries Unlimited, 2011.
- Uchida, Yoshiko *Desert Exile The Uprooting of a Japanese-American Family*, Seattle: University of Washington Press, 1982.
- *Journey to Topaz*, New York: Charles Scribner's Sons, 1971.